

特集号発刊にあたって

聖マリアンナ医科大学 雑誌編集委員長

あけま たつお
明間 立雄(生理学)

過去数年間で、わが国の医学教育は大きな変化を遂げてきた。その変化は、大まかに言って、医療や医学教育に対する社会からの要請と、従来の医学教育に対する医学・医療の内部からの反省の、両者に基づいていると考えられる。最近数年間にあった全国規模の主な制度的変化としては、次のものがあげられる。(1)「モデルコアカリキュラム」が示され、全国の医科大学・医学部の学生教育について内容・レベルの標準化が図られた。(2)「共用試験」(computer-based testing: CBT)が導入され、全大学で臨床実習前に学生の標準的な学力レベルが試されるようになった。(3)新臨床研修制度が施行され、救急医療を含むプライマリーケア能力の涵養が求められるようになった。

これらの変化に呼応する形で、各大学では、早期臨床体験(early clinical exposure: ECE)、課題基盤型学習(problem-based learning: PBL)、臓器別コースの導入などのカリキュラム改革が行われてきた。聖マリアンナ医科大学(本学)では、これらの改革に比較的早期から取り組んできた。そこには、専門医制度によって細分化された高度医療への対応と、社会からの強い要請である全人的医療とのバランスが医学教育に求められていることが、背景として存在している。ことに全人的医療は、本学の建学の精神である「生命の尊厳を基調とし、キリスト教の人類愛に根ざした医学教育」とも合致することから、本学の教育の大きな柱となっている。

雑誌編集委員会は、この度、特集「医学教育：卒前・卒後教育の現状と課題」を企画した。この特集は、医学教育の改革が本格的に始まってから数年を経た現時点で、現状と課題をあらためて検討し、医学教育の一層の改善に役立たせることを目的としている。医療における看護の重要性が近年一段と増していることから、看護教育にも2章を当てた。雑誌編集委員会では、これまでに、「21世紀のゲノム医科学、ゲノム医療の展望」(第29巻1号～第30巻2号)、「大学院技術セミナー」(第31巻5号～第32巻5号)、「プロテオミクス研究」(第33巻2号～5号)、「発生再生プロジェクト」(第34巻3号～第35巻3号)などの特集を企画し、集中連載の形で聖マリアンナ医科大学雑誌に掲載して来た。これらの特集は、最新の研究技法や研究成果などを紹介する目的で企画されたものであり、企画および個々の論文の内容については、幸い好意的な評価を得ることができたようである。一方、連載という体裁をとったことにより、読者の利便性が損なわれているとの意見も聞かれた。そこで今回の企画に当たっては、特集増刊号としてまとめて掲載することとした。このことによって、医学教育の現状と課題について、多面的な把握がしやすくなることを期待している。本特集企画が医学教育の一層の改善につながれば幸いである。